

⑤520<sup>?</sup> 倭人伝を讀む81<sup>?</sup>  
倭人伝を讀む82<sup>?</sup> 此の頁 2行 左端

東洋史 212<sup>?</sup> 吳  
540<sup>?</sup>

⑤520<sup>?</sup> 11行  
楚の友好国

春秋左氏 523<sup>?</sup> 系図  
⑤538<sup>?</sup> 倭人伝を讀む80<sup>?</sup>

⑤520<sup>?</sup> 中程

な お、  
この戦いのとき、吳国の南側に接する越国  
が吳軍の留守をねらって攻め込んできた。  
弟の夫概がこの混乱に乗じて国を奪おうと  
したので、闔閭は急ぎ帰国した。  
という。(「倭人伝を讀む」森浩一、中公新  
書、ハの頁。「東洋史辞典」創元新社へ吳  
他参照)

越は、  
越の都は、会稽におかしていた。  
楚の属国だった越は、楚の援助をうけて強  
くなり、允常の時代になって王を称した。  
その前に前述の通り、越王允常は、吳軍の多  
くが出払った隙に突然吳国を襲ったのである。  
ここに、吳・越の対立が激しくなった。

越は、  
越の都は、会稽におかしていた。  
楚の属国だった越は、楚の援助をうけて強  
くなり、允常の時代になって王を称した。  
その前に前述の通り、越王允常は、吳軍の多  
くが出払った隙に突然吳国を襲ったのである。  
ここに、吳・越の対立が激しくなった。

⑤521<sup>?</sup>  
- 2/3 系図  
この頁 185<sup>?</sup>



前页 459 改办

541<sup>P</sup>-2/6

夫差の虜となり、吳城の土牢に入れられ、幾  
 年かすぎていった。  
 とき、范蠡という越の忠臣がいた。身を  
 塩魚売りにやつて、ついに吳城の禁獄へ忍  
 びこみ、魚の腹に一片の密書をかくし、獄へ  
 投げつけて逃げた。――勾踐が魚を割ってみる  
 と、  
 「主君よ。范蠡がおります。どんな辱に耐  
 えても死に給うな」  
 とあつた。  
 講談社入院ノ庄参照第九十七章へ時非無范



龍上 338

天つき  
改訂

改訂

541-3/6

改訂

春秋左氏 427 下へ  
伍員 539 14行

後年の我が国の政策方針とあい通じるもの  
の國王に統治を継続させるというやり方は  
木なにおへ打倒した国を存続させ、且つ、元  
と越とは平らいだ。春秋左氏伝哀公元年条参照  
と主張し、吳王夫差は聴き入れなかった。そして吳  
うにもなりますまいし  
に土地に侵入して、代々の宿敵なので、戦い  
に勝ちなから討ち取ってしまわすく存続させて  
仇敵を大きくすれば、後で悔いてもど  
な人と危険なことでしよう。越は、我が国と  
根絶やしにするかよい山と申します。かかる  
にいま和睦し、越を豊かにし、ようとするのは  
こす場合には多いほどよい、病を治す場合には  
する、伍員はこう言った。  
た。  
結ぶ  
越王句踐は、吳の宰相嚭に頼って、和議を  
びたいと申し出た。吳王夫差は許そうとし



「新ヤ」(1)-397頁 ⑤43に最  
東経緯91°-20' 同緯 ⑦30° 776° 541°-4/6

⑦366°  
-3/

井上 298° 新ヤ(1)-397°  
経上 338° ⑦366°-2/4へ

|                                 |                                                  |                                      |                            |                                           |                                      |                                                                     |                                                                     |                                           |                       |
|---------------------------------|--------------------------------------------------|--------------------------------------|----------------------------|-------------------------------------------|--------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|-----------------------|
| 東<br>省<br>曲<br>阜                | （前<br>四<br>八<br>五）                               | 半<br>島                               | 江<br>と<br>淮<br>河           | 州<br>を<br>築<br>き<br>先                     | お<br>う<br>と<br>企<br>て<br>た           | た<br>り<br>の<br>地<br>域                                               | ど<br>は<br>中<br>原                                                    | 南<br>の<br>患                               | 人<br>の<br>か<br>あ<br>る |
| と<br>連<br>合                     | は<br>利<br>な<br>く<br>引<br>き<br>揚<br>げ<br>た        | た<br>齊<br>を<br>攻<br>め<br>た           | は<br>水<br>軍<br>を<br>派<br>遣 | 邗<br>溝<br>と<br>江                          | へ<br>進<br>出                          | （河<br>南<br>・<br>山<br>東<br>・<br>山<br>西<br>・<br>河<br>北<br>・<br>陝<br>西 | （河<br>南<br>・<br>山<br>東<br>・<br>山<br>西<br>・<br>河<br>北<br>・<br>陝<br>西 | の<br>伝<br>統<br>的<br>な<br>温<br>情<br>政<br>策 | の<br>か<br>あ<br>る      |
| て<br>齊<br>軍<br>を<br>破<br>つ<br>た | ふ<br>た<br>た<br>び<br>出<br>兵<br>し<br>て<br>魯<br>（山） | も<br>つ<br>と<br>も<br>こ<br>の<br>と<br>王 | 海<br>上<br>か<br>ら<br>山<br>東 | 邗<br>溝<br>と<br>江<br>蘇<br>省<br>揚<br>子<br>江 | 齊<br>・<br>晋<br>と<br>覇<br>權<br>を<br>争 | （河<br>南<br>・<br>山<br>東<br>・<br>山<br>西<br>・<br>河<br>北<br>・<br>陝<br>西 | （河<br>南<br>・<br>山<br>東<br>・<br>山<br>西<br>・<br>河<br>北<br>・<br>陝<br>西 | の<br>温<br>情<br>政<br>策                     | の<br>か<br>あ<br>る      |
|                                 |                                                  |                                      |                            |                                           |                                      |                                                                     |                                                                     | の<br>温<br>情<br>政<br>策                     | の<br>か<br>あ<br>る      |

水

（第二章末尾へ倭わ）  
の頃参照

△コケヨ ケー20 20×20

50

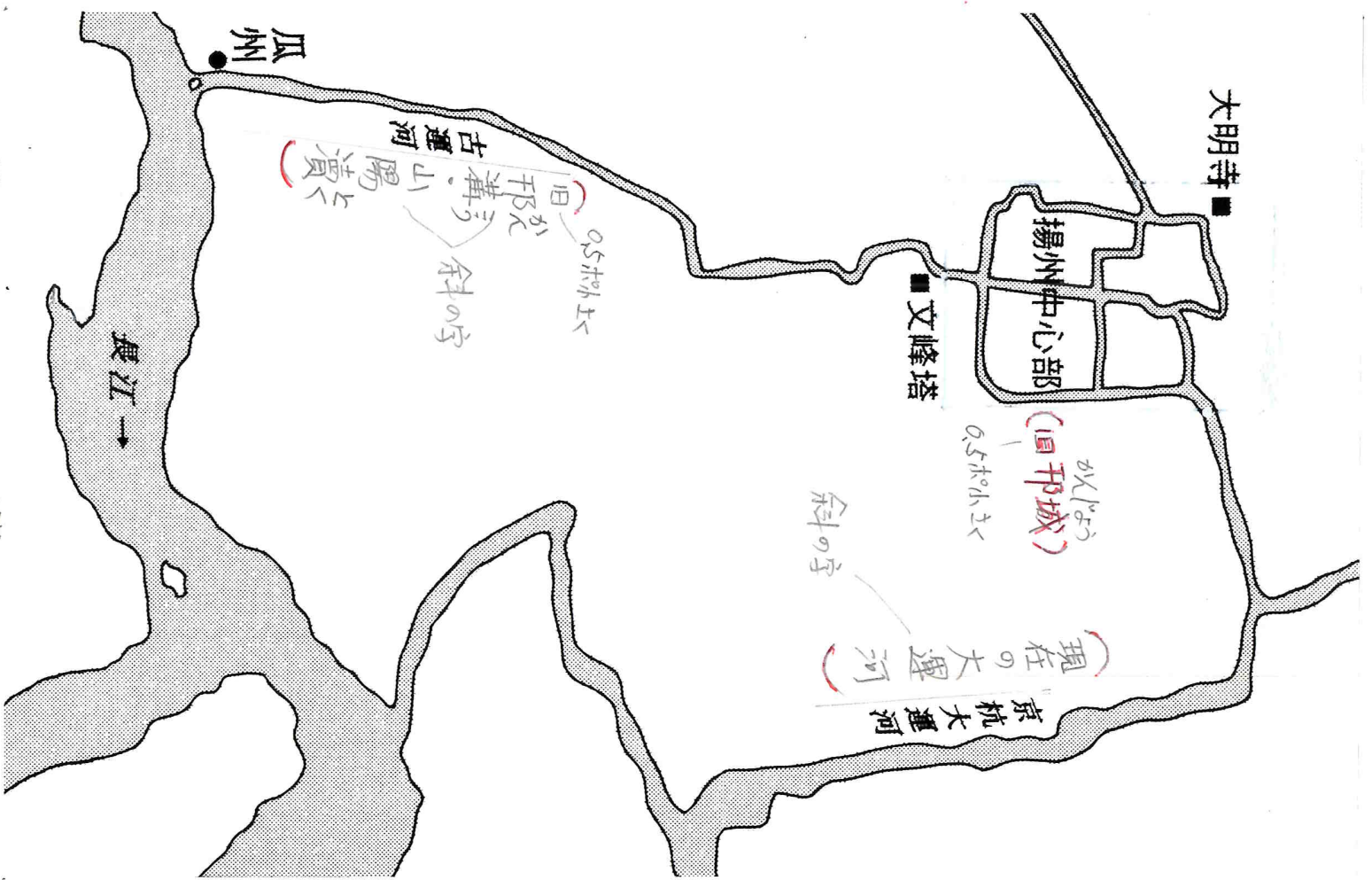
⑦776-9/ 18~1999



HL  
・M-スレ下さい。

・運河を全て、  
ブルーに17下さい。  
(ア3点HL)  
右側 左に(下)に  
大々おみ出し  
掲載下さい。

541P-5/6



1404 第162 凶 揚州 (旧干城) と古運河 (旧干溝・山陽瀆)  
1304 海のシルクロード (第6巻) 陳舜臣、日本放送出版協会、1989年2月26日発行、197頁参照

516頁20行  
5730P-1/2 松葉の教戸

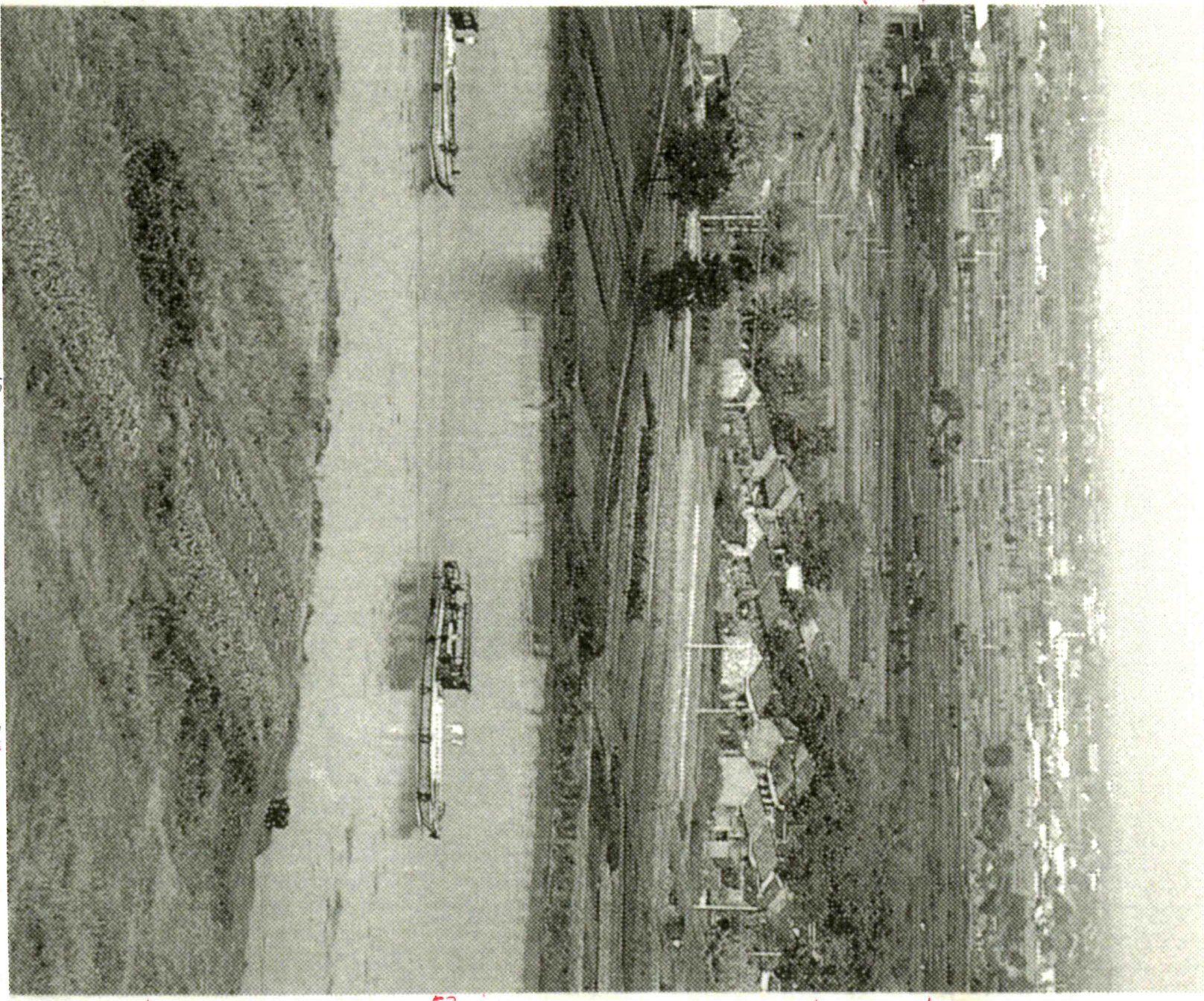
51

543P-5/6 109



適宜カマ↑  
左頭  
上巻分に  
大正人  
掲載  
下さい。

541<sup>P</sup> 6/6



1424 写真版 107 揚州 (旧) 邗城) 近郊。古運河 (旧) 邗溝・山陽瀆) (※現在)

1324 通シル (第6巻) 陳舜臣 日本放送出版協会、1989年2月26日発行、197~204頁  
1324 隋の文帝は、山陽瀆を開いた。邗溝をさらに大に広げたのだ。(参照)

→ 由 543<sup>P</sup> 5/6



$$542^{\text{P}} - 1/2$$

さら  
し  
前  
夏  
の

春秋左  
403<sup>1</sup>

其の後の前四八二年、みづから軍を率いて水  
 路を北上した吳王夫差は、晋の定公などの諸  
 侯と黄池（河南省封丘県）で会合し、晋との  
 覇権争いに勝ち、盟主（同盟の主宰者）の座  
 に就き、春秋五霸の一人になった。  
 一方、越王勾践は、いったん吳に降服した  
 ものの、会稽の恥を忘れないうちに、嘗胆（苦  
 い胆を時々なめること）して、国力の回復を  
 はかった。  
 吳王夫差が精兵を引き連れて  
 黄池の会へ行っている留守中、吳國へ侵入  
 し、守備軍を破り、吳城を陥落させ、吳の太  
 子友を殺した。  
 吳王夫差は、かうして都を回復した子の  
 のぐ、越の水軍が海上を迂回して淮河を  
 抑え、吳の北への要路を断った。  
 とうとうつづく連年にわたる敗戦と、天災とが  
 重なリ、吳は次第に衰えていった。  
 \* なお、吳國の太子友の死後、新たに太子が  
 立てられ、たのかどうかについては、わからな



⑤ 539

1/2  
4页

第 18 表 参照

＊トモあはれ  
もはやかつたの  
ような異国の繁

~~栄  
 加  
 訪  
 水  
 る  
 エ  
 と  
 な  
 な  
 か  
 っ  
 た。~~


 号一  
 て  
 つい  
 前  
 四七三年、  
 吳王夫差加自殺

吳は完全な滅人だ。

すなわち、こうして越は、会稽たいしやくの恥はにかを濯すす

く  
こ  
と  
が  
で  
き  
た  
。

発  
音  
し  
て  
あ  
る  
人  
を  
あ  
ら  
わ  
す  
。

スキャン  
3740


 ↑↑↑↑  
 因  
 み  
 に  
 述  
 べ  
 る  
 と、  
 曰  
 春秋  
 左氏  
 伝  
 曰  
 哀公

二十二年（前四七三年）条、および、史記に

越王句踐世家に、  
こう記されてい  
る。

1  
2



徐州・山東 崑崙山 1222<sup>P</sup> 543<sup>P</sup> - 1/2  
 春秋左氏 460<sup>P</sup> 史記卷六上 465<sup>P</sup>  
 561<sup>P</sup> - 1/2

次頁  
から

七三 条は「こう記されてい  
 十一月丁卯の日に、越が呉を滅ぼした。  
 呉王を甬東（越いま浙江省）に住まわせた。といた。  
 孤（余）は老いた。越の君に仕え  
 呉王（夫差）は、  
 と辞退し、自ら縊れて死んだ。越の人は、その  
 屍を持って帰った。  
 長年の宿敵を  
 の後、北進政策をとり、盛時には徐州（山



H9, 12, 14 (回)

H18, 3, 11

H29(2017)12.20 ~ 12.22 (4回)

H30(2018)12.3 ~ 12.4 (3回)

令和元(2019)12.4(3回)

令和元(2019)12.11(3回)

令和2(2020)7.25(3回) ~ 7.27(4回)

新書 212<sup>P</sup>

543P - 7/2

新書時代 元126<sup>P</sup>  
新403 ~ 新221

はおう  
霸王元1768<sup>P</sup>

554<sup>P</sup> 同文

前頁

中公新書、

ハートハ三頁参照)

春秋左氏伝

まう  
とになる。(「倭人伝を読む」森浩一、

東省(滕県)で齊・晋などの諸侯と会し、霸王  
と称して都を山東の瑯邪へ遷したとさえあ  
った。  
以上の呉越対決の話は、知られてい  
そのとおりであつたかどうかが疑わしい。奥  
ようするに両国は互いに勢力争いをしながら  
も山東から中原へ進出し、華夏の国々への仲  
間入りをはかつた。とはいえやがて、両国とも急  
速に衰微し、戦国時代になると越も楚に滅ぼさ  
れ(前三三四)、呉越の地は楚に併合されて  
まう



改行 戦国 91P  
同文 526P

544P-1/2

567P-1/2 13年  
前四七三年  
王緑 268P  
帝王の血統 皇統  
前四七三年  
呉 武王 伯 33  
(ウーイー)  
89P 110P 111P  
542P-1/2 4年

おうとう  
王緑 268P  
帝王の血統 皇統

前四七三年  
呉 武王 伯 33  
(ウーイー)  
89P 110P 111P  
542P-1/2 4年

大カンワ P  
1241  
武王九曲  
九曲 漢有り。

後一  
七、四夷伝、倭人条に  
先述のとおり  
先述のとおり  
の子孫(太伯の血を引く者)が居た、とも考  
えられよう。  
たとえば太子友の男の子  
と心に誓い、  
だが、そうとばかりは言いきれない。  
えーしまったのだろうか。  
そうかも知れない。  
だが、そうとばかりは言いきれない。  
へい、この日にか、きつと再起を  
と心に誓い、  
臥薪して時の来るのを窺う呉王  
の子孫(太伯の血を引く者)が居た、とも考  
えられよう。  
たとえば太子友の男の子  
と心に誓い、  
だが、そうとばかりは言いきれない。  
えーしまったのだろうか。  
そうかも知れない。  
だが、そうとばかりは言いきれない。  
へい、この日にか、きつと再起を  
と心に誓い、  
臥薪して時の来るのを窺う呉王

武王山中の苦難の時代  
前四七三年に呉王夫差が自殺して、呉国は

滅亡したとさ

それでは、呉王夫差が自らの命を絶った時  
太伯に連なる呉王の血筋もまた、絶た  
えてしまったのだろうか。  
そうかも知れない。  
だが、そうとばかりは言いきれない。  
へい、この日にか、きつと再起を  
と心に誓い、  
臥薪して時の来るのを窺う呉王

完全



⑤26<sup>1</sup> 秋之儀 94<sup>P</sup> 改訂

⑤30<sup>7</sup> 中央 倭人の祖先達の言を  
信じた。

⑤44<sup>P-2/2</sup>

自称 自分から書きた  
実体はどうか、  
当時がどうだったか  
を  
女王の出現 16<sup>P</sup>

100%の捨てる  
短絡的に

・ 日 梁書 (卷五四、諸夷伝、倭条) に  
「倭者自云太伯之後」  
と記されている。(第六章へ太伯の子の有無  
について✓の項において既述)

■ 察するところ  
倭人の祖先は、  
「私達は、太伯の血筋を引く呉王の末裔な  
のです」  
と誇らしく答えたのであろうと思われる。

この記事を「確定」することにより、  
「否定」がちなものである。  
「たぶん」な答はない。  
と頭から決めてかかっているのだらう。  
「倭人が」の祖先は周の王族の太伯だ。  
「倭人」などとは自称していないというの  
は、  
どうもあやしい。  
「た」だ。だから中国の人が、  
そういう知恵をつけたのかも知れない。  
等々と考え、あっさり無視してまいがちな



タイハ 65 否定するニと雖トテ生れ給 540-1/3 12/13 545

221 540-1/3

のである。(「女王王国の出現」小林行雄、文  
英堂、一六頁参照)

(\*)

だが、そのもの、  
少ない発掘例などを通して、  
我々には、  
遙かに遠い  
古代史書や、  
想像

極言すれば、

へ本当は、古代の真実の歴史について、  
く分かっていないわけではな  
い。いや、  
往古の歴史の殆どが未だ解明されておらず、  
不明な点や認識不足である部分が多い。  
とさえ思われる。  
ともあれ私序は、短絡的に  
肯定し、  
物事を考え直  
して見る必要があるのではないか。荒

7 既述



① 一つの女子例をあげてみよう。

司馬遷が  
諸国をめぐり歩いて見聞し、

水(みづ)をまとめて著述した  
史記(しき)の冒頭「殷

本紀  
殷王朝の系譜  
帝堯の子の契から

帝辛（紂王）に至るまでの四十三人の系図

か  
掲  
載  
さ  
水  
7  
い  
る  
。

し  
か  
し  
な  
か  
ら

殷王朝は、恐らく、ただ単なる伝説上の

王(わ)にすきなのだらう

[illegible]

紀初頭迄  
般の  
實在性  
について  
疑問視

さ  
水  
フ  
フ  
ハ  
テ  
き  
た。

そこでこの系譜を、当然ながら、全く信頼

さ  
水  
て  
い  
な  
か  
た  
。

ところから、近年の殷墟発掘と遺物の研究

に  
よ  
つ  
て  
寸  
分  
の  
疑  
う  
余  
も  
な  
く

般王朝は歴史的に存在した王朝だった

という事実が証明された。

一か何と、亀甲や獸骨の卜辞（トイのこ

と  
ば<sup>9</sup>  
)  
に  
より  
下  
薺<sup>ア</sup>  
薺<sup>ア</sup>  
(帝<sup>ア</sup>  
EX<sup>ア</sup>  
告<sup>ア</sup>  
告<sup>ア</sup>)  
から  
)  
帝<sup>ア</sup>  
辛<sup>ア</sup>



改行

547<sup>P</sup>

(紂王のとき)

いたい同じような系譜をたどり、<sup>680</sup>史記とた

のである。(「中国のあけぼの」貝塚茂樹、河

出書房、四七・七九頁。「甲骨文の世界」白

川静、平凡社、四一〇頁参照)

これは、驚嘆すべきことであつた。

史記は、古代王朝殷の時代の系譜につ

いて、真実を語つてゐたのだ。

\*

そしてまた、こう言われてゐる。

「世界中、この国の古代史でも、上古の

ことになる、伝説と歴史とが混り合つてゐて

明確に見分けるのは甚だむづかしい。いまま

で歴史的事実とみくらへたもののなかにも

いろいろ後代の修飾がはいつてゐて、伝説と

あまりちがひないものがあるとも、伝説

のなかに、しばしば歴史的事実の裏打ちの面

がある。L



次頁21行 出題目次頁1699



2013年10月16日  
出鱈目1521  
吹聴1913  
自慢1016

548-2/2

543-1/2  
自慢1016  
観点501  
「視点をえて」540  
改行

るまいか。  
それにして、不審に思えることがある。  
ここに、別の観点からみてみたい。  
仮りに、倭人の祖先は太伯でなかったものな  
も、もしもそうなら、  
呉王夫差の自殺によって太伯の王統は絶え  
てしまった。と常識的には考えられるのに、  
一体何故、倭人は自らあえて、  
太伯の後である匹  
と公言したのだろうか。  
と疑問視される。  
●そのような信じ難い奇妙な血脈を、己の  
出自をより良く見せようとして、自慢を中国  
人に吹聴するものであろうか。  
●そんな虚偽の血統を主張したら、  
倭人達は、全く筋の通らない出鱈目な系  
譜をでっちあげている。しかしまあ、  
あまりにも思慮が無さすぎる。嘘をつくにし  
ても、もっと巧妙な系図を考えたらよさそう  
なものなのに、太伯の後とはあまりにも見え  
すいた虚言し



入 出 出 見えた 前末  
 史を見ることが 明らかなら 1845  
 入 笑止千万 元1092 笑ひまじ  
 入 笑ひ 2382

朝鮮半島南端域・北九州・山口地方に置かれ百余国

八代・宇土地方

「倭人が吳王の末裔だなどとは、全く以て  
と嘲笑されるのは、火を見るよりも明らか  
な事である。」  
■ところが、そのような他国人の思惑など、  
少しも意に介さず、倭人は自らそのを、  
□太伯の後である□  
と、きっぱり言いつ切っているのである。  
では、どう考えたらよいのだろうか。  
■やはり、倭人の言葉には、真実性があるよ  
うに思われる。  
●真実だからこそ、誰に憚ることなく、自  
らまで語を主張して、  
□太伯の後である□  
と言ったのであろう。

この物語では、すでに述べたとおり、  
今太伯、そして吳王の血を受け継いだ者が、  
（吳滅之後）江南近傍の地において細々と命脈を保ち、やがて会稽の東冶から東遷し、箕子が支配する百余国中の極南界の地に



549<sup>P</sup>-2/2

かいめア 173  
壊滅, 滅んT63

526<sup>P</sup>  
同文 530<sup>P</sup>

日倭奴国<sup>めいなんこく</sup>を建国<sup>けんこく</sup>することになる  
と解<sup>かい</sup>して話を進<sup>すす</sup>めてゆき<sup>ゆき</sup>たい。  
六章<sup>ろくしょう</sup>へ太伯<sup>たいはく</sup>の子<sup>こ</sup>の有無<sup>いうむ</sup>について<sup>543-1/2</sup>の項<sup>こう</sup>におい  
て既述<sup>きじつ</sup>と  
■とすると、吳王夫差<sup>ごおうふうさ</sup>が自害<sup>じがい</sup>して、吳国<sup>ごこく</sup>が滅<sup>めつ</sup>  
亡<sup>ぼう</sup>してから以降<sup>いこう</sup>太伯<sup>たいはく</sup>の後<sup>のち</sup>と自稱<sup>じしやう</sup>  
する者<sup>もの</sup>達は、何所<sup>どこ</sup>に逼<sup>ひつ</sup>していったというの  
であ<sup>だ</sup>らうか。

\*



仙霞岭山脈  
浙江省  
福建省  
高等地圖 51 P  
車次 616 P

⑤ 557  
1057



550<sup>p</sup> - 2/3

上側

- ・カラー
- ・右頁の上半分に大きく掲載下か!

- ・上下を間違えないで下さい。



半字A4L

写真図版 108 武夷山中の崖墓 (洞窟)

67<sup>p</sup>

『中国』世界遺産の旅、第4巻 長江流域・華南、講談社、2005年12月10日発行、131頁参照、

九曲溪の兩岸などの絶壁にある自然の洞窟に、遺体が安置された。

67<sup>p</sup>

67



550<sup>p</sup>-3/3

上側

・カラー  
・左頁の  
上半分に  
大きく掲載  
下さい。

・上下を  
隔り  
ないで下さい。



68<sup>p</sup>

半角

写真図版 109 <sup>きやうきよべかい</sup>九曲溪南岸 <sup>かいほ</sup>大蔵峰の崖墓(洞窟)

561<sup>p</sup> 4/6 中央部に大蔵峰

『中国世界遺産の旅』第4巻長江流域・華南 <sup>ちやうきやうい</sup> <sup>かいほ</sup> <sup>どうくつ</sup> 講談社 2005年12月10日発行 132頁参照

68



傳人伝も読む  
93°  
696R 10/  
子母 かんろ 名録 } な  
合子 身と蓋から取れる器 ころすてきりう

大ナ 1031 漢  
 又 吳モ ン  
 大ナ 2365 漢  
 陶 吳タ ン  
 大ナ 2174 漢  
 取 吳セ ン

ていた。  
一つの洞窟内に、木棺が一つの棺も置かれて  
いるところさえあつたが、多くは一、二棺で  
ある。  
木棺は、楠、杉の木材でつくられ、棺蓋と  
身が合子式に子母口で合わされてゐる。  
木棺の形には、円筒状や長方形のもの、蓋  
が屋根形をしてゐるもの等があり、断面が楕  
円形のものもあつた。  
なお、屋根形の蓋をもつ形式の木棺が存在  
してゐる点から見ても、貴溪県の山岳地帯に生  
んでゐた者達の家は、高床式であつたろうと  
想定されてゐる。  
副葬品として、土器、原始青磁、竹木器、  
紡織品などがある。  
これらの概略を述べたが、  
①土器 前二〇〇〇年代前半に江南地方で出  
現したとされる印文陶には、軟陶と硬陶  
がある。  
②原始青磁 は出土容器の約四分の一を占め、



小箱 大27  
824 1877  
510  
278

大27 (カ小箱)  
841  
679

大27 1877 大27 708  
大27 1877 大27 708  
大27 1877 大27 708

551P-2/4

大27 1554  
大27 1554  
大27 1554

大27 1554  
大27 1554  
大27 1554

④  
この崖墓の年代は、土器（印文陶）の型式。  
（麻の一種、からむし）がある。  
紡織品には、平織の絹布、麻布、苧布。  
の琴、木剣がある。  
筒、木盒（化粧箱）、木案（台）、十三弦。  
これらのほか、竹蓆（あしき）、竹管、竹。  
器、木盒（ふたのある容器）が載せられて。  
た時、その上に木製の紡織機、象牙櫛、玉。  
盤（物）をのせる平らな台）がある。調査。  
水ものなどがある。  
三足罐、飯（蒸し器）を盛る丸い小さな杯（酒を飲）。  
み物などを混ぜ合わせる取手付き容器。  
容器の形式には、鼎、罐、壺、提梁盃（飲）。  
水に次いでいる。  
と薄（い）ものが多く、青灰釉、青褐色釉がこ。  
胎土は青灰色で、釉薬には黄釉の濃いもの。

大27 2412

大27 2280  
大27 2280  
大27 2280

大27 2568  
大27 2568  
大27 2568



155°に詳しい  
120°

551°-3/4

2650 安家  
-1982 574-1/3  
前 668年 -2/3

小林春秋前770~前450  
10747頁の時代区分表 05  
558°の年代は

(\*)

定で約二六五〇年前と出たことから見て、春秋時代  
秋時代は前七七〇から前四〇三は前四  
二二一の初期から戦国時代へ前四〇三前  
という。へ倭人伝を読むと森浩一、中公新  
書、昭和五十七年（一九八二年）十月二十五日初  
版、八九頁、九二〜九三頁参照  
呉国が滅亡した前四七三年は、丁度、春秋  
秋時代の末期にあたる。（第4表人周の時代区分）参照  
すなわち、呉国が滅びた頃、あるいはそれ以前  
以降に、これ等の山崖墓が作られたと考える  
水因みに述べると、横穴の奥を幾つかに区画  
する構造の横穴式石室は、北九州地方に集中  
肥後地方特有のものであり、古墳時代全期  
間にわたって、古墳の横穴式石室内部に、複  
する風習がある。複数体を合葬する風習は、  
制みられるという。（「其筋」第二編）墓



東洋史 911-2 地図を記す！  
⑤533P ⑤538P ⑤551P ⑤553P ⑤557P ⑤558P ⑤559P ⑤560P ⑤561P ⑤562P ⑤563P ⑤564P ⑤565P ⑤566P ⑤567P ⑤568P ⑤569P ⑤570P ⑤571P ⑤572P ⑤573P ⑤574P ⑤575P ⑤576P ⑤577P ⑤578P ⑤579P ⑤580P ⑤581P ⑤582P ⑤583P ⑤584P ⑤585P ⑤586P ⑤587P ⑤588P ⑤589P ⑤590P ⑤591P ⑤592P ⑤593P ⑤594P ⑤595P ⑤596P ⑤597P ⑤598P ⑤599P ⑤600P ⑤601P ⑤602P ⑤603P ⑤604P ⑤605P ⑤606P ⑤607P ⑤608P ⑤609P ⑤610P ⑤611P ⑤612P ⑤613P ⑤614P ⑤615P ⑤616P ⑤617P ⑤618P ⑤619P ⑤620P ⑤621P ⑤622P ⑤623P ⑤624P ⑤625P ⑤626P ⑤627P ⑤628P ⑤629P ⑤630P ⑤631P ⑤632P ⑤633P ⑤634P ⑤635P ⑤636P ⑤637P ⑤638P ⑤639P ⑤640P ⑤641P ⑤642P ⑤643P ⑤644P ⑤645P ⑤646P ⑤647P ⑤648P ⑤649P ⑤650P ⑤651P ⑤652P ⑤653P ⑤654P ⑤655P ⑤656P ⑤657P ⑤658P ⑤659P ⑤660P ⑤661P ⑤662P ⑤663P ⑤664P ⑤665P ⑤666P ⑤667P ⑤668P ⑤669P ⑤670P ⑤671P ⑤672P ⑤673P ⑤674P ⑤675P ⑤676P ⑤677P ⑤678P ⑤679P ⑤680P ⑤681P ⑤682P ⑤683P ⑤684P ⑤685P ⑤686P ⑤687P ⑤688P ⑤689P ⑤690P ⑤691P ⑤692P ⑤693P ⑤694P ⑤695P ⑤696P ⑤697P ⑤698P ⑤699P ⑤700P ⑤701P ⑤702P ⑤703P ⑤704P ⑤705P ⑤706P ⑤707P ⑤708P ⑤709P ⑤710P ⑤711P ⑤712P ⑤713P ⑤714P ⑤715P ⑤716P ⑤717P ⑤718P ⑤719P ⑤720P ⑤721P ⑤722P ⑤723P ⑤724P ⑤725P ⑤726P ⑤727P ⑤728P ⑤729P ⑤730P ⑤731P ⑤732P ⑤733P ⑤734P ⑤735P ⑤736P ⑤737P ⑤738P ⑤739P ⑤740P ⑤741P ⑤742P ⑤743P ⑤744P ⑤745P ⑤746P ⑤747P ⑤748P ⑤749P ⑤750P ⑤751P ⑤752P ⑤753P ⑤754P ⑤755P ⑤756P ⑤757P ⑤758P ⑤759P ⑤760P ⑤761P ⑤762P ⑤763P ⑤764P ⑤765P ⑤766P ⑤767P ⑤768P ⑤769P ⑤770P ⑤771P ⑤772P ⑤773P ⑤774P ⑤775P ⑤776P ⑤777P ⑤778P ⑤779P ⑤780P ⑤781P ⑤782P ⑤783P ⑤784P ⑤785P ⑤786P ⑤787P ⑤788P ⑤789P ⑤790P ⑤791P ⑤792P ⑤793P ⑤794P ⑤795P ⑤796P ⑤797P ⑤798P ⑤799P ⑤800P ⑤801P ⑤802P ⑤803P ⑤804P ⑤805P ⑤806P ⑤807P ⑤808P ⑤809P ⑤810P ⑤811P ⑤812P ⑤813P ⑤814P ⑤815P ⑤816P ⑤817P ⑤818P ⑤819P ⑤820P ⑤821P ⑤822P ⑤823P ⑤824P ⑤825P ⑤826P ⑤827P ⑤828P ⑤829P ⑤830P ⑤831P ⑤832P ⑤833P ⑤834P ⑤835P ⑤836P ⑤837P ⑤838P ⑤839P ⑤840P ⑤841P ⑤842P ⑤843P ⑤844P ⑤845P ⑤846P ⑤847P ⑤848P ⑤849P ⑤850P ⑤851P ⑤852P ⑤853P ⑤854P ⑤855P ⑤856P ⑤857P ⑤858P ⑤859P ⑤860P ⑤861P ⑤862P ⑤863P ⑤864P ⑤865P ⑤866P ⑤867P ⑤868P ⑤869P ⑤870P ⑤871P ⑤872P ⑤873P ⑤874P ⑤875P ⑤876P ⑤877P ⑤878P ⑤879P ⑤880P ⑤881P ⑤882P ⑤883P ⑤884P ⑤885P ⑤886P ⑤887P ⑤888P ⑤889P ⑤890P ⑤891P ⑤892P ⑤893P ⑤894P ⑤895P ⑤896P ⑤897P ⑤898P ⑤899P ⑤900P ⑤901P ⑤902P ⑤903P ⑤904P ⑤905P ⑤906P ⑤907P ⑤908P ⑤909P ⑤910P ⑤911P ⑤912P ⑤913P ⑤914P ⑤915P ⑤916P ⑤917P ⑤918P ⑤919P ⑤920P ⑤921P ⑤922P ⑤923P ⑤924P ⑤925P ⑤926P ⑤927P ⑤928P ⑤929P ⑤930P ⑤931P ⑤932P ⑤933P ⑤934P ⑤935P ⑤936P ⑤937P ⑤938P ⑤939P ⑤940P ⑤941P ⑤942P ⑤943P ⑤944P ⑤945P ⑤946P ⑤947P ⑤948P ⑤949P ⑤950P ⑤951P ⑤952P ⑤953P ⑤954P ⑤955P ⑤956P ⑤957P ⑤958P ⑤959P ⑤960P ⑤961P ⑤962P ⑤963P ⑤964P ⑤965P ⑤966P ⑤967P ⑤968P ⑤969P ⑤970P ⑤971P ⑤972P ⑤973P ⑤974P ⑤975P ⑤976P ⑤977P ⑤978P ⑤979P ⑤980P ⑤981P ⑤982P ⑤983P ⑤984P ⑤985P ⑤986P ⑤987P ⑤988P ⑤989P ⑤990P ⑤991P ⑤992P ⑤993P ⑤994P ⑤995P ⑤996P ⑤997P ⑤998P ⑤999P ⑥000P

↑↑↑なお、呉国が滅亡した前四七三年は、  
丁度春秋時代の末期にあたる。  
すなわち、呉国が壊滅した頃、あるいはそ  
れ以後のころに、これ等の崖墓が作られたと  
も考えらる得るわけである。

先述のように、  
△呉国（滅亡以前の呉国）は『揚子江の下  
流域』江蘇省（太湖あたり）一帯にひろがる平野  
にあった。

（第161回参照）第六章へ呉国の台頭への項に  
おいて既述）東洋史辞典・創元新社・付録

春秋時代  
とはいえ、呉王夫差が越王勾践を降した直後ころの盛時  
は、江蘇省南部から浙江省へかけての広い地域  
を領有したのかも知れない。

さて、武夷山脈先に述べた江西省貴溪県漁塘  
公社の仙岩一帯において発掘された土器・原  
始青磁のなかで、  
△鼎・△提梁盃などには、

浙江省紹興県杭州の東・会稽山の北の鳳  
（杭州湾南岸）春秋時代の越の都



徐州 今の山東省南部の554江蘇省北部の地  
 いま江蘇省北部 二に  
 548-3/4  
 542-3/4  
 544 P  
 543 1行  
 542-3/4  
 11行へ

天つき  
改行

改行

鳳山の墓から出土するものと同類であり、青  
 磁の文様も揚子江下・中流域に広く見られる  
 ものである。  
 つまり、揚子江下・中流域から浙江省にか  
 けての人々と、この山岳部の人々との間には、非常に  
 密接な関係があったことが示されていいる。  
 いう。（「倭人伝を読む」森浩一、中公新書、  
 九二・九三頁参照）  
 したが、断片的すぎるかも知れないが、  
 ように解釈してみたい。  
 (1) 前四七三年に吳王夫差を自殺に追い込  
 んで吳を滅ぼした越は、その後北進政策を  
 とり、徐州（山東省滕県）で齊・晋などの諸  
 侯と会し、霸王と称し、都を山東の瑯邪に遷  
 したこともあった。（「倭人伝を読む」ハ三頁  
 (2) こうした時、吳国の落武者達は  
 吳王の後胤を擁しつつ、越国の手うすとなっ  
 た南方の奥深くの地へと分け入り、やがて武甕  
 山の山中に身を潜め、たのかも知れないで  
 左ううか。

既述

こと







556P

えんけんせいど  
え 665P

郡県として支配し、また有能の士を抜擢登用  
 したから、人材輩出し、土地の制限が廃され  
 て民の私有制がおこり、富者兼併の勢いが全  
 れたという。へ「東洋史辞典」創元新社へ戦  
 国時代✓参照）  
 ■太伯の後と称する者達は、こうした時流に乗り  
 この地の豪族へとの上りつたものと想  
 像される。  
 武夷山の東方（今の福建省）へ打って出て、  
 この地方（福建省あたり）の土着民の長と

しての権勢を牛中に収めたのではなかろうか。

✕